

馬鹿日和

蛍の周りにはバカが多い。自分の周りを見渡して、我ながら呆れてしまう。

その筆頭はもちろん、蛍の親友だ。

「ほたる〜っ！」

授業が終わり、寮への帰り道。

「蜜柑が満面の笑みで蛍の元へ走ってきて、「蛍、明日予定開いとる？」と訊ねてきた。

彼女が犬だったら、しっぽはブンブンと勢い良く振られているはずだ。

「なあなあ、セントラルタウンに行かへん？ この前出来た雑貨屋さん、一緒に行こっ！」

「そうね……」

蛍の返事を待つ間、蜜柑の架空のしっぽはちぎれそうなほどに振られている。

大きな目を輝かせ、今にも蛍に飛びつく風情だ。

彼女のまぶしいほどの笑顔。

その素直な感情表現が、バカだからこそそのまっすぐな想いが、どれだけの人間を救ってきたのだろう。

「明日雨じゃなかった？」

おかげで今日一日雲に覆われたすっきりしない天気だった。

蛍が空を見上げると、蜜柑も一緒に空を見る。

「ええやん。雨降ってもどうせ雑貨屋さんの中やし。人が減ってかえってええかもしれんし」

「そうね……」

新しくできた雑貨屋は大人気で、女生徒たちで大混雑だと聞いている。

蜜柑の言うことにも一理ある。

バカの言うことに、うっかり納得してしまった。

にこにこ顔の蜜柑を見て思う。

バカは嫌いじゃない。

ほら、委員長も。

今でもやっぱりみんなのために委員長という面倒な仕事を引き受けて、穏やかな顔でしっかりとこなしている。

蜜柑とはまた違った強さを、彼は持っている。

いつだってにこにここと笑いながら、みんなのために頑張

っている。だからみんなが彼を信頼している。

蛭だつて、要領が悪くてバカだと思うけど、見習わないけれど、委員長を尊敬はしているのだ。

ルカ君も、きつと本人は否定するけれど、委員長と同類よね。自らつい貧乏くじを引いてしまうタイプだ。

やっぱり蛭の周りには、バカばかりだ。
そう、ルカ君の親友だつて。

ぐいっと腕を引かれた。

「なあ、蛭つてばー」

蛭がなかなか返事を返してくれないことに待ちきれず、拗ねたような蜜柑の声に蛭は我に返つた。

「そうね、明日ね、」

明日は新しい発明に取りかかりたかつたけれど、蜜柑と一緒にセントラルタウンへ行くのも悪くない。

最近はいつも彼女を取られてしまうのだ。蜜柑と遊ぶのも久しぶりだ。

いいわよ、と返事を返そうとして、こちらを見据えながら近づいてくる人物に気が付いた。

日向棗だ。

タイミング悪く来る男だこと。

眉間には深くしわが刻まれている。どうやらいつも通り機嫌が悪いらしい。

蜜柑も不機嫌な顔で近づいて近づいてくる棗に気づき、蛭の腕にしがみついた。

「……なんやの」

蜜柑も棗を睨んで、不機嫌そうな声だ。

「あら、あんたたち、喧嘩したの？」

彼らの喧嘩はほぼ毎日のことで全く珍しくはないが、すぐに仲直りをする。……というか、単細胞な蜜柑が怒っていたことをすぐに忘れて、機嫌を直してしまうのだけれど。

蜜柑のこの様子では、珍しく長引いているようだ。

「喧嘩やあらへん。棗が勝手に怒ってるだけや！」

そつぽを向く蜜柑は、確実に怒っている。

蛭が微笑みを棗に向けると、棗の眉間のしわはますます深くなった。おもしろい。

「何があつたの」

訊ねると、蜜柑が教えてくれた。

「あんな、下駄箱にウチ宛の手紙が入つたんやけど、それ棗が燃やしてしまつたんよ」

「あら」

「いきなり燃やすなんて、ひどいと思わへんっ?!」

事情が見え、蛭は棗にやや同情を帯びた視線を向けた。

その蛭の視線に気づいた棗の眉間のしわが、ますます深くなる。

「ウチ、中身全然読んでへんし、差出人の名前すら見てる暇あらへんかったんよ」

「お前はそんなにラブレター読みたかったのかよ」

不機嫌そうに言う棗を、蜜柑は睨んだ。

「手紙を読まずに燃やすなんて、相手に失礼やる。そもそもラブレターとは決まってへんし」

「下駄箱に勝手に入れられてる手紙なんて他にねえだろ。知り合いなら今時メールだ」

「けど、ウチ、ラブレターなんてもらうあてあらへんもんつ。絶対アンタの勘違いやつ！」

蜜柑は蛭にしがみついたまま棗と言いつけている。

「それにもしラブレターやったとしたら、きちんとウチ好き人いますって断るのに」

「そんなの相手は百も承知だろうが。お前と俺が付き合ってるの知らない奴は、この学園にはいねえよ」

「そんなん分からんやろー」

ここは棗の言い分の方が、間違いなく正しいだろう。だが蜜柑は鈍いのだ。

「日向棗の彼女」に手を出すような男はそもそもこの学園にそれほど多くないし、手を出そうとする向こう見ずな男は蜜柑に近づくはるか手前で、棗の牽制を食らって追い払われている。

だから蜜柑にとつては、初めてもらったラブレターであり、初等部の頃ルカと棗に告白された以来の恋愛大事件なのだ。

それに、彼女は。

蜜柑は棗が好きなのだ。

だから揺らがない。

他に自分に好意を寄せる男がいても、蜜柑の気持ちはますます棗へと向けられているから気づかない。

棗はそれもよく分かっている、それでも不安なのだろうけれど。

二人の気持ちに手が取るように分かるが、蛭は介入を避けた。

バカップルは犬も食わない。

蛭が放っておいても、どうせすぐに仲直りするのだ、この二人は。

ほら、今だつて。

「それに、」

蜜柑の声に真剣味が混ざった。

「あんたはそんなくだらんことで、アリス使ったらあかんのっ！」

棗の目が見開かれた。

「……紙を燃やすぐらいどーってことねえよ」

「それでもっ！」

蜜柑の声が湿ったことで、棗は事実上の白旗宣言を上げたようだ。

棗はいきなり話を変えた。

怒っていた声の調子と表情を和らげる。

「おい、明日、」

「明日は蛭とセントラルタウンに行く約束したんよっ」

蜜柑はぎゅっと蛭の腕にしがみついたままだ。

棗は何気ない風に、さらに尋ねた。

「何時までだ」

ふくつと膨らんでいた蜜柑の頬が、急に元に戻った。

話の流れが急に変わって、蜜柑の頭では付いていけないらしい。

「何時って、ウチら、新しい雑貨屋さん見に行くから」

「そっちが終わったら、ホワロンの店の前で待ち合わせる

ぞ」

「え」

蜜柑の予定を尊重するという、日向棗にしては謙虚な申し出。

蜜柑はその棗のわざとらしい珍しい態度に、早くも動揺している。

「おごってやる。どうせ小遣い前で買えねーんだろ」

「ウチを食べ物で釣ろうとか、そんなん」

あら、一応気づいたのね。棗がホワロンで蜜柑を釣ろうとしていることに。

だが彼女は、すでに棗のペースに乗せられていることには気づいていない。

「いらねえのか。ならいい」

「や、ちょっと待ってや。えっと……」

交渉を打ち切れそうになり、蜜柑は焦りだした。

棗はまた眉間にしわを寄て、不機嫌そうな顔を作っているのだが、蛭にはそれは演技だと分かる。

蜜柑はおろおろと、棗の顔を見、蛭の顔を見た。

こんなありきたりの罠に完全にはまっている。

バカな子。……けれど、愛しい子。

蛭は軽くため息をついて、蜜柑の背中を押してあげた。

仕方がない。ここは蜜柑のためだ。

蜜柑だつて、もちろん本当は棗君と仲直りしたいのに決まっているのだから。

「蜜柑、ごめん。私、明日は用事があったのを思い出したわ。

棗君と行つてきたら？」

「え、あ、そう、なん……」

そこへ棗がすかさず口を挟んだ。

「じゃあ、朝待ち合わせるぞ」

「……そうやな」

蜜柑がうなずくと、棗は蜜柑の方へ左手を差し出した。

「行くぞ」

「……うん」

蜜柑がおずおずとその手を取ると、棗は蜜柑の手をしっかりと握り直して歩きだした。

蜜柑が慌てて振り向く。

「蛭、また今度一緒に行こうなっ！」

その顔は、もう笑顔。

「……」

少し悔しい。結局また蜜柑を取られてしまったではないか。このまま負けっぱなしは癪に障る。

「棗君、」

呼びかけると、棗も振り向いた。

「貸しだから、これ」

ひらひらと手を振ると、棗の不機嫌顔が本物になった。

「……明日セントラルタウンで、カニ味噌買ってくる」

「よろしく」

蜜柑は二人のやり取りの意味が分からず、蛭と棗の顔を交互に見比べていた。

バカな子たち。

棗君も、あれ、相当バカよね。結構バカよね。どうしようもなくバカよね。

うもなくバカよね。

でも嫌いじゃないのだ。

棗のバカ具合も、そうでなければきっと蜜柑を任せてはいない。

あの二人が少しだけ、うらやましくすら覚えてくる。

「……のは、きつと錯覚ね。さすがに」

さて、明日はどうしようか。一人でセントラルタウンへ行つてもつまらないし、そもそも。

蛭は空を見上げた。

太陽は見えず、辺り一面曇り空だ。明日はやはり雨だろ

うか。一人では雨の中出かけるのも億劫だし、やっぱり部屋に一日籠もって新しい発明品を作ろう。そろそろお小遣いも足りなくなってきたことだし。

蛍が考え込んでいると、遠くから聞きなれた声が聞こえてきた。

「……ルースカイツ！」

声は徐々に近づいてくる。

バカがもう一匹来た。

蛍が振り向くと、すでに目の前に颯がいた。

全速力で来たのか、ぜいぜいと肩で息を繰り返している。

「クッ、ブル、スカッ」

「……」

蛍は視線を前方へと戻し、そのまま颯に背を向けて歩きだした。

寮に帰ろう。

颯は慌てて蛍の横に並んで歩き出す。

「なあなあ、クールブルー、スカイ」

まだ息は調いきっていないようだが、颯は満面の笑みを

浮かべていた。

こいつもしつぽがある系のバカだ。

「明日の休み、一緒にセントラルタウンに行かないか？」

蛍は颯の笑顔を見て、次に空を見た。

「嫌」

蛍の言葉に、がっくりとどうなだれる颯を見て、思わず付け足してしまった。

「……雨が降ったら面倒ですから」

「じゃあさじゃあさ、」

颯は顔を上げた。

なかなかには彼はめげない。さすがしつぽ系バカだ。

「雨が降らなかつたら、一緒にケーキ食に行かないか

……？」

「それって、颯先輩のおごりですか？」

「もちろんっ！」

「新しく出来た雑貨屋さんにも行きたいんですけど」

「クールブルースカイの行きたいところなら、どこへでもっ！」

鼻息荒く言う颯に、蛍はちぎれそうなほど勢い良く振られるしつぽが見えた気がした。

「じゃあ雨が降らなかつたら行きます」

「よっしやーっ!!」

颯は大きくガッツポーズを取った。

「こうしちゃいられねえ。俺、明日が晴れるよう、てるてる坊主作ってくるな。じゃあまた明日な、クールブルースカイツ！」

颯は蜚の返事を待たずに、風のように走り去っていつてしまった。

バカだ。

けれど、バカの執念は侮れない。

翌日の朝、気持ちよく晴れ上がった空を見上げ、蜚は小さく笑った。

今日はしつぽ系バカその2とセントラルタウンに行く。

雑貨屋さんに行って、恐らくいるだろうしつぽ系バカその1の蜜柑と、その蜜柑バカの二人を――、正確には蜜柑バカの方をからかって遊ぶ。

それからしつぽ系バカその2にケーキをおごってもらおう。

なかなか楽しそうな一日になりそうだった。